

# 保育者及び教諭養成における童謡曲演奏の技術と指導法に関する一考察

## —前年度からの発展を中心に—

大阪芸術大学短期大学部 通信教育部保育学科 特任講師 塩野 亜矢子

### 1. 本研究の背景と目的

諸大学及び諸短期大学における保育学科への入学生について、かつては入学前に『バイエル・ピアノ教則本』を終え、入学してからのピアノ実技に困ることのないように準備をすることが一般的であった。しかし、「平成 22 年度入学時ピアノ初心者(本学ではピアノ未経験者からバイエル 43 番まで演奏可能な者をさす)は 13.2%であったが、平成 23 年度入学時のピアノ初心者は 37.5%を占めた」ことを指摘している(梶本 今井 上田,2012,p.41)ように、ここ十数年における諸大学及び諸短期大学の保育学科に入学する学生のピアノ経験者数が減少傾向を続けていることは、顕著に表れている。それに伴い、諸大学及び諸短期大学の保育学科では、学生がピアノ未経験者であることを中心としたカリキュラムの設定が前提となりつつある。

本学のピアノ実技に係るカリキュラムも同様に、単位習得における認定内容や授業の在り方は、ここ数年も変遷を辿っている。今後も入学時点で多数のピアノ未経験者の学生が見込まれることから、指導者側においてもより現状に即した内容が求められることを筆者は実感している。

このような背景から、筆者は昨年に塚本学院教育研究補助費を活用し、ピアノ初心者が少しでもこどものうたの弾き歌いを演奏し易くするツールの 1 つとして、こどものうたの伴奏型に着目し、より短期間で演奏することが可能となる演奏法の習得について考察を試みた。学生自身が楽譜に書かれているピアノ伴奏が難しく、演奏が困難な場合において、代替可能な範囲の伴奏型を論理的に教授することで、最終的には学生自身がその知識を基に実践可能な演奏方法を導き出し、弾き歌い演奏の技能向上に結び付けることを目的とした。授業数及び研究期間上、一定の内容に留まっていたことから、今年度はその続編を研究することを目的とする。

### 2. 研究の内容と方法

本研究は前年度と同様に、ピアノ初心者の学生を中心に考察を行った。前年度に本学学生に対して教授した内容を学生が記憶していることを確認するところから考察を開始した。記憶が断片的であったり、次段階がどのような内容であったかを失念しているケースが見られたことから、復習に重きを置きながらも、ある程度学生自身で解答に結び付けるところまで辿り着けると見計らい、調号を 1 つずつ増やしながらか前年度と同様の過程を辿り、再び学生自身で解答を導き出す過程を考察した。調性や調性判定及び主要三和音に関する性質の理解など、これらの

過程は順を追った行程を 1 つも抜かさずに積み重ねることが最終的な理解に繋がる性質を持つことから、学生が最終的な理解を得るためには多くの授業及び時間を費やしたことは今回の考察においても否めないが、今後学生自身がその技術を活かし、どの作品においても応用し得る技術を習得し、弾き歌い演奏を容易に実践するには必要不可欠な内容と考え、本研究にて学生に対して行う最適な教授過程を考察及び研究した。楽譜は前年度と同様に本学の「音楽Ⅶ及びⅧ」において使用する『こどものうた 200』(小林美実(編)、1975、チャイルド社)を考察対象としたが、今回は同一曲が他調で記譜されている他版も考察対象に加えた。筆者が授業で教授した内容と、教授を受けた当該学生に対し行う対話を通して学生の観点との関連性を探り、相違が見られた場合はその修正を図りながら、教授する内容が指導者側の一方的な理解や所見ではなく、相互の視点を踏まえながら、より正確な教授方法を見出すことを試みた。

### 3. まとめ

本研究は、楽典の基礎的知識を用いながら最終的には楽譜に譜されている左手における音の内容を、代替可能なコードで演奏出来るところに結び付けることにある。その行程は、筆者が理論上においては最適と考えられる順を追いながら考察及び研究を進めるものの、最終的には学生自身の実技演奏に結び付けるため、その考察における検証が論理的であったとしても確たる実証がない限り、効果の範囲や考察内容を断定することは出来ない。しかし、筆者は確実な音楽理論を用いて学生の演奏における現状の把握及び演奏意識を確認しながら、正しい理解及び演奏における考察を重ねてきた。

その結果、①本研究により、調号 2～3 個までの楽曲は、学生自身で正しい解答に結び付けられる傾向が高いこと、②それには本研究の内容をある程度反復して学修を継続する必要があること、③同一曲が他調で記譜されている場合においても、調号 2～3 個までの範囲であれば正しい解答を導き出せる事例が見られたことが、本研究の考察結果のなかで傾向が強いことが判明した。特に③の他版において他調で記譜されている曲にも左手が担う伴奏型に、主要三和音を用いた内容を学生自身が導き出し、演奏するところまで培われた例が見られたことは、その演奏技術が本学を卒業し、保育現場に携わる際の演奏にも紐付けられることを可能とし、有意義な結果が得られたと考える。